

■プロジェクト概要

田根まちづくり協議会と滋賀県社会福祉事業団の要望で、長浜市高畑町に認知症対応型デイケアセンターを建設することになった。小林博人研究室とKMDWの共同設計。皆で支え合い安心して暮らせる街を目指し、地域の福祉拠点となるような施設をめざした。また、伝統的な古民家の空間構成を活かすことで、認知症の方が自分の家にいるかのように感じ、自由に行動できる設計になっている。

■プロジェクトの本質

老々介護が求められる限界集落の介護施設のあり方として、「高齢者の動きと古民家の空間構成を踏襲すること」「地域に開かれていること」を重視し、提案している。

※認知症対応型デイケアセンターとは…認知症高齢者が対象で、入浴や排泄、食事などの身の回りの世話やリハビリといったサービスを日帰りで受けられる施設。

■介入方法…私なりの『安全と自由』の両立方法の提案

症状の進行を遅らせる為に、慣れ親しんだ空間で自由に体を動かす事が有効である。しかし、自由には危険が伴う。つまり、『安全と自由』の相反する目標の両立が、認知症ケアに重要と言える。今回は、認知量高齢者に予想される危険として「脱走」に焦点をあて、右記2つの視点から、対策を提案する。

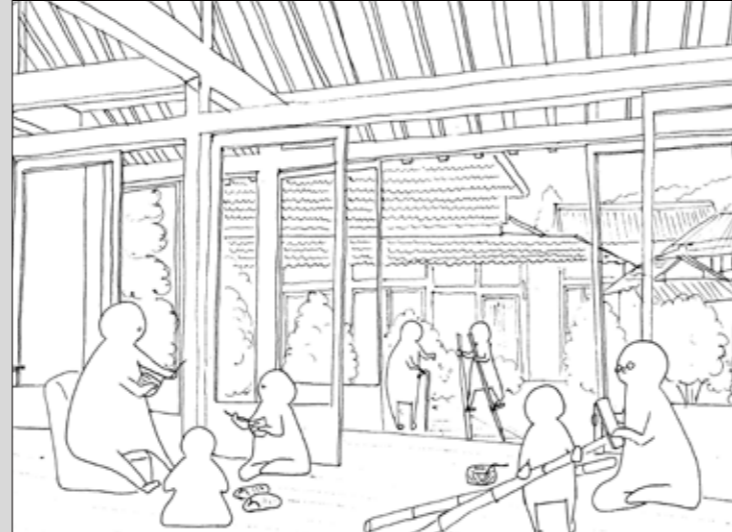
- ①脱走を未然に防ぐ
 - ・出入口に人の交流の場所を作り、皆で動きを見守る。
 - ・出入口に興味を引くものを置き、脱走を思い留まらせる。
- ②脱走をしてしまった場合に早期発見する
 - ・高齢者と地域住民の交流を深め、地域一帯となって見守り、脱走にすぐに気付けるようにする。

【現状と提案の比較】



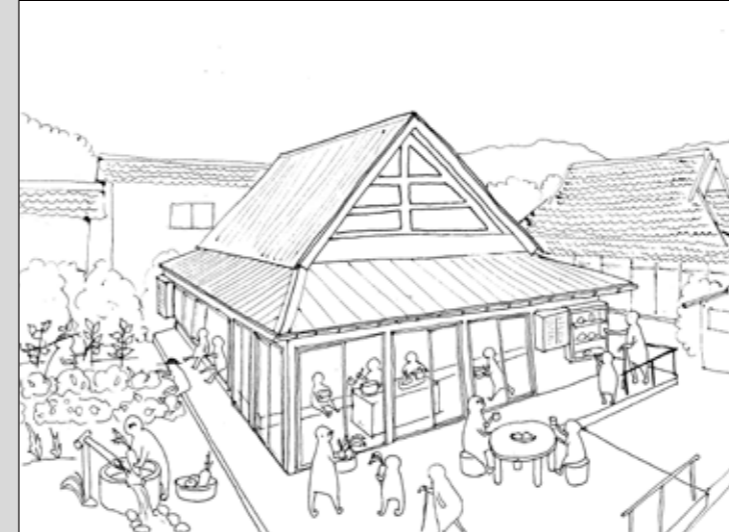
①デイケアセンターと古民家を渡り廊下で繋ぐ

古民家は、子供の塾やまちづくり協議会の会議で使用され、地域住民の集まる場所である。そこで、向かい合う縁側を同じレベルの渡り廊下で結び、気軽に行き来できるようにした。施設内に人が来ることで、介護従事者以外の見守りの目も加わり、高齢者が危険に陥るリスクが軽減される。また、渡り廊下を2段のステップに分けることで、高齢者が腰掛けて休める場所を作り、外に出ることへのストレスを取り除いた。



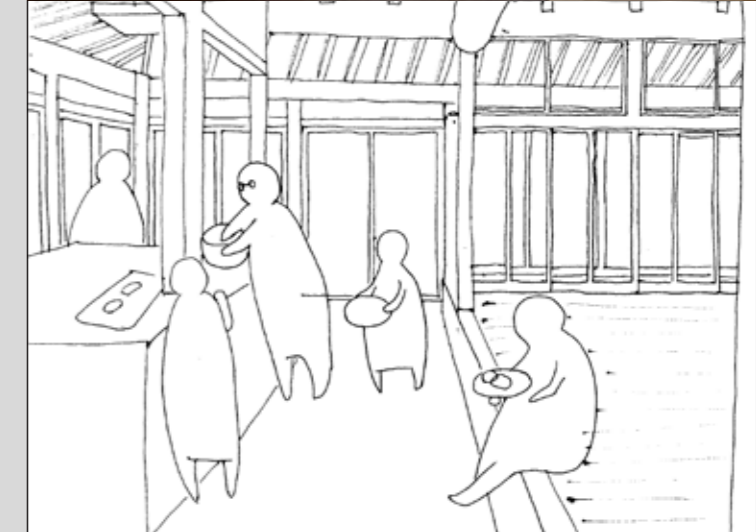
②居間で昔の遊び講座を開催

老々介護が余儀なくされる限界集落において、高齢者ケアへの子供達の参加は必要不可欠である。そこで、古民家から来た子供達と高齢者の交流を深めるため、「昔の遊び講座」を実施する。認知症患者は、直近の記憶は曖昧でも、幼い頃の遊びは鮮明に覚えていることが多い。そこで、昔の遊びなら子供達と楽しむことができると考えた。また、遊びを通して体や頭を使い、症状の進行を遅らせることを狙う。



③畑と交流スペースを設ける

昔は、庭で野菜を作り、水路で洗って、土間で調理するという生活をしてきた。そこで、隣の敷地に畑と水路を設け、高齢者が、昔の生活を再現できるようにした。また、土間に台所を設置したので、畑で採れた野菜をそのまま調理し、隣接する交流(休憩)スペースで地域の方と食事が楽しめる場とした。このように、出入口に交流の場を作ることで、高齢者の動きを皆で見守り、脱走を防ぐことができる。



④広場側を全面土間と開口に

広場に面して全面開口、土間に変更し、台所も土間に設置した。この台所では、高齢者主催の料理教室を開催する。以前、豆腐屋や饅頭屋を営んでいた高齢者もあり、職業として身につけた技術は体が覚えていることが多いため、実施可能だと考える。また、人に教えるという行為は、自己肯定や存在意義といったポジティブな精神状態に繋がり、症状の進行を遅らせることができると期待する。